

レッジョ・エミリア市における芸術教育

—「レッジョ・ナラ」を中心に—

高野 牧子（山梨県立大学）・濱口 由美（福井大学）

キーワード：レッジョ・ナラ 芸術教育 表現 幼児期 生涯学習

要 旨

レッジョ・エミリア市で開催されている語りの祭典「レッジョ・ナラ」の視察を中心に、レッジョ・エミリア市全体で表現者をどのように育てているか、その取り組みを検討した。その結果、レッジョ・エミリア教育を土台として、幼児期から一人一人の表現を育む中、「レッジョ・ナラ」という街全体で開催する「語りの祭典」は、市民による表現活動の発表の場であるとともに、プロの表現に親子で一緒に触れ、芸術と関わる場でもある。幼児期から始まる芸術教育は、小学校・中学校・高校、そして生涯学習へ繋がり、生涯を見通した芸術教育が行われ、表現者、鑑賞者を育てている。また、「子どもの頃から市民である」という意識を持たせ、街全体が表現の場となり、プロも保護者も、障害の有無や人種を超えて、多様な表現を認め合うことにより、感性を高め、表現力、観賞力を育てていると考えられる。

はじめに

レッジョ・エミリア市はローリス・マラグッツィによる幼児教育により、著名になった街である。「幼児学校と乳児保育所の指針」(2014)によると、「教育は、すべての人、すべての子どもの権利であり、それはコミュニティの責任である」とし、「聴くこと、対話すること、参加することから教育は生きた物」になると述べている。

街と子どもたちとの幼児教育での繋がりは深く、レミダといって街の中での廃材を集め、教育の資源として有効に活用する取り組みも行っている。また、レッジョ・エミリア教育の根幹となるプロジェクトツィオーネ（プロジェクト）では、街で子どもたちが探究した事例も数多く報告されてい

る(C.Rinaldi他:2016、AGAC:2012、佐藤:2011)。

例えば、今でも街の南北を繋ぐ地下道には子どもたちが「自転車プロジェクトツィオーネ」として探究し、描いた自転車の絵やコラージュが残っている（森：2013）。また、「シアターカーテン」は、市の劇場の緞帳を子どもたちがデザインした壮大なプロジェクトツィオーネである。その過程は著書としてまとめられており、その中で、2002年当時レッジョ・エミリア市の文化教育コミッショナーであったPiccinini (2012)は「子どもたちと街の間で対話を進めていくことによって、この劇場の緞帳のような特別な作品を生み出すような経験」を成し得たと述べている。

森 (2013) はこうした取り組みについて、

次のようにまとめている。

「レッジョ・エミリア市の実践の柱であるプロジェクトツォーネ（プロジェクト）は、好奇心旺盛な探究者である子どもが今を充実して生き、学ぶプロセスを大切に、との考えを基盤に、子どもの驚き・発見・興味・関心から子ども同士、教師、アトリエリスタ、ペタゴジスタをはじめ、教職員、保護者や地域との対話から繰り広げられる総合生活」としている。

このようにプロジェクトツォーネは子どもの興味関心から端を発し、対話を通して学びを深め、幼児学校の枠組みを超え、市内全体を学びの場へと拡大していることも大きな特徴であり、地域の人々の理解と支援により、この学びが実現できていると考えられる。

そこで、1つの幼児学校での発表会から始まり、現在では地域の祭典として根付いた「レッジョ・ナラ」を対象とし、街での芸術教育を検討していくこととする。

1. 研究目的

本研究の対象とする「レッジョ・ナラ」は、レッジョ・エミリア市で毎年開催する語りの祭典である。市内の各所で多様なパフォーマンスやワークショップが展開されている。

これまでに筆者らは2015年、2016年、レッジョ・エミリアにある幼児学校4園とボローニャ・レミダを視察し、『子どもたちの100の言葉』として表されている多様な表現方法に通底する身体表現性に着目し、論考した（高野：2016）。また、2016年レッジョ・ナラも初めて視察し、その具体的な内容についてまとめた（濱口・高野・檜崎：2017）。さらに、2018年のレッジョ・ナラの視察については、市民参画型パ

フォーマンスとして、その特徴を明らかにし（濱口・高野：2018）、さらに2016年からのレッジョ・ナラの変容を質的成長として捉え、市民表現教育プロジェクトとして検証した（濱口・高野：2019）。

本稿では、これまでに取り上げていなかったパフォーマンス事例とインタビュー調査、及びドキュメンテーション調査を基に、その身体表現性の視点より、いかにして街全体で、表現者を育てているのか、その取り組みについて明らかにし、感性を高め、表現力、観賞力をいかに育むか、検討することを研究目的とする。

2. 研究方法

期間 2018年5月17日（水）～5月23日（火）

場所 イタリア、レッジョ・エミリア市、及び、国際マラグッツィ・センター

方法 (1) Reggio narra 2018の視察

(2) 国際マラグッツィ・センターでのドキュメンテーション調査及び文献収集

(3) Marina Castagnetti 氏（国際マラグッツィ・センター内ドキュメンテーションセンター所長）へのインタビュー調査

3. 結果および考察

(1) レッジョ・ナラ（Reggio narra）2018 概要

レッジョ・ナラとは、レッジョ・エミリア市で開催される「語りの祭典」であり、2018年5月18日～20日、市内37カ所で開催された。子どもたちを地域で、街ぐるみで育てていこうという思想の基、子どもから大人まで参加できるプログラムやパフォーマンスが100以上あり、市民たちや外国からの視察者も含め、街中で多様な表現が繰

り広げられた。12回を迎えた今年のテーマは「incontramenti」という造語で、人々が出会い、繋がることの大切さを訴えたものであった。

レッジョ・ナラ2018の特徴を4点にまとめ、以下に論じる。

(2) レッジョ・ナラ2018の特徴

① プロのアーティストによる幼児向け身体表現

レッジョ・ナラではプロのパフォーマーも招かれ、参加している。今回、1～4歳向けのパフォーマンスでは、La Baracca - Testoni Ragazziという2人組のアーティストが「Girotondo」と題し、大小様々なバランスボールと可動式のライトを使い、言葉を話すことなく、身体表現のパフォーマンスを繰り広げた。月と太陽の追いかけっこ、光と影による昼と夜が巧みに表現され、ファンタジックで子どもにもとてもわかりやすく、秀逸であった。(図1、2)

終演後、子どもたちは大小のバランスボ



図1
光と影を巧みに使う



図2
最後に地球に見立てた大きなバランスボール登場



図3 終演後に追体験する

ールと灯りで遊び、パフォーマンスを追体験していた。(図3)

2016年のレッジョ・ナラにおいても、プロのアーティストによる幼児向けのパフォーマンスは、ほとんどセリフがなく、身体表現と光と影で構成され、終演後には今回と同様に主人公のかもめに観客の子どもたち全員で変身し、今鑑賞した内容を自分の体の動きで追体験していた。

異なるアーティストではあるが、鑑賞後の追体験は同様であり、子どもたちが観て、その表現を追体験し、理解を深めていく方法であると考察する。

② 多様性を認め合うパフォーマンス

100キロを超えるような巨漢の女性ダンサー

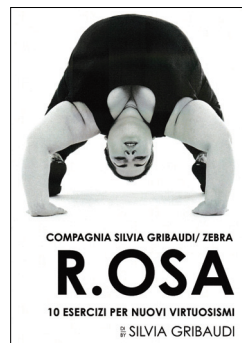


図4 ポスター

ー(R.O.S.A)によるソロパフォーマンスには、小学生から中学生たちがクラスで観覧に来ていた(図4)。パフォーマンスのはじめに、簡単な自己紹介を英語で行い、その後、観客に

立つように指示し、観客たちは彼女の真似をして同じように動いた。速いビートにあわせて、両手を横に振ったり、足踏みしながら腕を伸ばしたり、簡単に誰もがすぐに真似できるような動きで観客全員がダンスを一緒に楽しみ、すぐに会場は盛り上がりを見せた。その後、観客は着席し、彼女のソロパフォーマンスとなった。巨漢にも関わらず、動きにはキレがあり、パワフルであった。

パフォーマンス後、観客の子どもたちから感想や質問をする時間を設けた。「なめらかな動きで体が自由に感じた」等の感想

があり、パフォーマーは「観客がパフォーマンスを視覚的に受け止め、それが感情に訴えかけることが重要」と語った。

黒人の方によるアフリカの話には広場い

っぱいの聴衆が集まっていた(図5)。時にはボンゴを鳴らし、リズムに乗った語り口だった。レ



図5 パフォーマンスの様子

ッジョ・エミリア市の移民の割合(16.4%)は、イタリア全体の約2倍であり、移民問題は大きな街の課題である。互いを尊重しあう文化を醸成する企画の一環であると考えられる。

「La vita fragile (脆弱な生活)」と題されたシアターパフォーマンスの出演者は、精神的なクリニック、カウンセリングに雇っている方々であった。(図6)



図6

会場のホール前のロビーには、階段状の宣誓台が用意され、

観客の誰もが登り、自分の意見等を述べていく。シアターの中から聞こえる嬌声や叩き割るような音、そしてバンドが奏でるメロディー、シアター内で何が行われているのか、空想しながら入場を待つ間、語りたいたい人々が宣誓台に登り、演説をしていた。観客も主体的にすぐに演者になれる仕掛けであった。

観客は小グループで入場し、ホール内で様々な繰り広げられるシーンを巡っていく

体験参加型のシアターである。

少人数で暗幕を抜けてホール内へ入ると、ステージと観客席が分かれている通常のシアターではなく、観客席はなく、ホール全体で様々なパフォーマンスを行っていることが見渡せる。

まず始めに、左手上方に自転車が置かれている。吹流しのように多くの布きれが付けられ、風を受けてなびいている。年配の女性が現れ、語り始める。そして、いくつかの半透明の横スリットの入った壁から中を覗くように促される。小さなスリットからは、それぞれのパフォーマンスがより鮮明に浮かび上がる。

壁のドアが開き、いよいよ中へ入ると、次は、男女ペアが台上の椅子の上に座り、ロール紙をすごい勢いで繰り出している。言葉の洪水と紙の散乱が増幅しあい、異次元の世界を生み出している。

次は1人の女性が、木の台のところで語っている。そして観客の何人かに単語が書かれた紙を渡した。また次のコーナーでは、マイクが横に5本並び、2人が前に立ち、何かを力説していた。また、ゆっくり2人でシャンソンに併せて組んで踊り、そこへ観客も参加するシーンもあった。

さらに唐突に、赤いかつらをつけた多くのパフォーマーが一斉に空間を走って横切り、対面の椅子に登るなど、全体のパフォーマンスも繰り出された。同時進行で起こっていることを統合するような全体を使ったパフォーマンスも重ね、パフォーマーと観客が相互作用していく体験型シアターであった。パフォーマーが自分のことで、自分を吐露し表現していた。ある程度セリフが決まっているように見えたが、突き刺すような言葉の強さ、鋭さ、激しさがあり、混沌とした中で、それぞれの壊れや

すい生活が見えるような工夫がなされていた。

多様な人々の多様なパフォーマンスを積極的に上演していることが、今回の特徴であると考えられる。このようなパフォーマンスを市民の誰もが観ることができ、互いを尊重し、認め合う土壌が醸成され、自分らしく表現できる自由を保障していることが認められる。

③ 世代を繋ぐ表現の場

「Paesaggi Sonori I tre Rastrelli Musicanti」は、音楽科がある地元公立中学校のパフォーマンス。特に入学試験に音楽実技はなく、音楽の好きな子どもが通っている。

幼児から高齢者まで満員の観客の中、弦楽演奏や合唱の他、ブラシを持った2名の女子学生と男性1名が現れ、ブラシの柄をスティックで叩きながら、リズムを合わせた楽しい演奏を披露した(図7、8)。次には「SOUND VORKERS COMPANY」



図7
中庭に子どもから高齢者
まで満員の観客



図8 ブラシで演奏



図9
身近なものを持ち、入場
行進



図10 身近な物が楽器に！

と書かれた看板を持った子どもを先頭に、大勢の中学生たちがリコーダーやブラシ、ワインの空き瓶、木製の椅子、革ベルト等を持った学生たちが観客の周りを行進し始めた。ワインの空き瓶を吹いて音を出し、革ベルトでパンとリズムを入れるパフォーマンスも行われた(図9、10)。地元特産の身近な物を使った楽しい演奏が続き、会場全体が一体となり、素晴らしい演奏会となった。

終演後、出演していた生徒達に尋ねたところ、10歳から入学し、1年目はリコーダーを練習し、2年目にピアノ、ヴァイオリン等の楽器を選択しているそうである。現在13歳で、週2時間音楽の専門の先生が教え、練習した成果が今日のこのパフォーマンスだったとのことである。大成功のパフォーマンスに達成感があったようで、感激して泣いている生徒も見受けられ、興奮と感動が伝わってきた。ユニークな発想がとても楽しく、練習を積み重ねてきたことがわかる楽しいアンサンブルであった。

高校生たちによるオーケストラとダンスの公演「Corpi sonanti - In Ascolto」は、屋外の会場で、夜に開催された。黒のパンツに白のブラウスを着た高校生男女約30名による約1時間のパフォーマンスであった。スクエアに並べた椅子があり、それぞれの椅子での演奏と舞台でのダンスパフォーマンスで構成されている。

この高校は、レッジョ市内にあるコンセルバトワールであり、音楽を専攻する高校である。パフォーマーは全員から始まり、男女2人や男性のみ、男女ペア12組など次々と入れ替わり、シーンが繋がっていく。照明でも変化を付け、巧みな構成と美しい音楽、そして舞台での身体表現が統合する。男女ペアの動きは、社交ダンスのように男

女で組み、前後に歩くなど単純であるが、思春期の男女の少しはにかんだような初々しさが微笑ましい(図11、12、13)。

全体には音を身体の動きで表現し、それにより、曲をさらに深く理解し、自分の演奏にも還元していく。往還的な音楽教育の作品であった。



図11 担当楽器を持ち、登場



図12 周囲で演奏する中、中央ではダンスで音楽を表現



図13 カーテンコール

中学生や高校生のパフォーマンスを小さな子どもから高齢者まで、多くの観客が観に来ていた。レッジョ・エミリア市の子どもたちが芸術に興味を持ち、成長段階によってより充実した芸術表現を学んでいる様子を見ることができた。こうした世代を繋ぐパフォーマンスを市民が共有していた。



図14 「Rodaribus」のパフォーマンス



図15 熱演の「ZIRK Comedy」



図16 広場に集まり、楽しむ観客たち

④ 街中が舞台 参加型パフォーマンス

「Rodaribus」という企画は、図14に見えているバスに子どもたちが乗り、市内各所を巡りながら読み聞かせを行う企画である。街のいくつかの場所に停まっては、そこでもその場にいる観客を巻き込んでの参加型パフォーマンスが繰り広げられた。

また、「ZIRK Comedy」と題する男女2人組の観客参加型パフォーマンスは街の中心にある広場で昼から深夜まで何度も開催され、多くの観客を動員し、参大いに盛り上がっていた(図15、16)。

「Costruire ? facile ? (建築は簡単?)」と題するパフォーマンスは、男性2名で、最初はダンボールでせっせと何かを組み立てていく。次第に、円形の机が出来上がったところで、いよいよ観客も参加。出来上がった円形のテーブルに座る(図17、18)。1人ずつ小さな布切れが配られた。最初の課題は、「1つの小さな箱に全員の布を詰めることができるか」である。次の課題は、「馬の絵はがき」、隣の人の絵葉書と見比べ、どこが違うか話し合うものだった(図19)。最後に建物の写真、2枚を見てどちらがいいか決める。決まった方の建物をジェンガの木片を1人2つ使って全員で作る。これは、1回目は全員適当だったのでやり直しになり、2回目完成後、上からポラロイドカメラで撮影し、終了となった。

突然に寄せ集められ、参加することとなった観客たちは、課題行いながら、他者を思いやり、協力し、意見を述べ合うこととなり、一体感を生み出す内容であった。

参加型のパフォーマンスでは、最初は観客としての立場であったが、パフォーマンスに参加することで、次第に意識がパフォーマーの立場へ移行していったことも興味深い。つまり、いつでも誰でも表現者にな



図17 ダンボールが並ぶ



図18 円形の机が完成



図19 絵葉書を見比べる

れることを実感できる機会が多く設けられ、街全体で表現者を育てていると指摘できる。

(3) 国際マラグッツィ・センターでの調査

ドキュメンテーション・センターには、レッジョ・エミリア教育を実施している幼児学校のこれまでの取組の資料が保管されている。その中で、Ernesto Balducci (2014) の資料を検索した結果、身体表現に関わる活動がされていることが確認できた。ドキュメンテーションとして残っていたのは、ヨガやバレリーナを園に招き、一緒に活動したものが多い。ただ、1回の活動で終わるものではなく、活動を重ね、多様に表現を広げていることが興味深い。

レッジョ・ナラでの鑑賞と同様に、単に1回の受動的な鑑賞で終えず、鑑賞後に質疑応答や追体験ができるような時間を設け、より深く感じて表現する機会を設けていくことが特徴である。

レッジョ・ナラでのプロのパフォーマンスにおいても、必ず追体験の時間の設けており、子どもが体を通して学び取る過程を大切にしていると考えられる。

(4) M.Castagnetti 氏へのインタビュー

M. Castagnetti 氏ははじめに、「私たちの教育プロジェクトにおいて、教師は子どもたちをアシストするという役割であり、こうしたアプローチ方法、子どもとの関わり方こそが教育哲学であることが大前提である」と語った。そして、レッジョ・エミリア教育における創造性と身体性について、Castagnetti 氏は「100の言葉」として語られる理念である「子どもの無限の可能性を広げるために、多くの選択肢を用意し、一人ひとりのニーズに応え、伸ばしていく」ことを強調し、そのために「教師側がゴールを決めてしまうのではなく、子どもが探索し、発見し、工夫し、創造していくことをいかにサポートするかが重要である」と語った。

センターと同じ敷地に設置されている幼児学校と小学校は3歳～11歳まで26名が在籍し、異年齢交流を行うと共に、プロジェクト型学習が展開されている。こうして同じ敷地内で、同じ教師、ペダゴジスタ、アトリエリスタをシェアし、実質的に幼小連携が図られている。また、保育内容、子どもの育ちをドキュメンテーションとして可視化し、これを活用することで教師間、教師と保護者間などで情報共有と連携を丁寧に図っていることを説明された。

さらに、市の教育機関であるSEI (Spazi Educativi interdisciplinari: 学際的教育スペース) は、6-12歳の年齢層を対象とし、幼小を接続する機関として、市内6個所に設置され、レッジョ・アプローチを活かし

た教育サービスを提供している。また、小学校と連携を取りながら、学校のカリキュラムを深めて行くための教育研究の場にもなっている。誰もが必要に応じて利用でき、マラグッツィ・センターはこのSEIとも連携を図っている。複層的に子どもが選び、ニーズに応じて対応できるような工夫が市全体として取り組まれていることが提示された。

4. まとめ

レッジョ・ナラの「語り」は石井 (2018) が「アート語り」と呼ぶように、単に言葉で語りかけるだけでなく、映像や身体も含めた表現である。しかし、これまでは言葉での表現が中心であったのに対し、今年の特徴は、音楽表現や身体表現、演劇表現など表現の多様性がさらに広がった。特に身体表現はより重視され、言葉によらないパフォーマンスも多く展開された。

また、中学生や高校生のコンサートがあり、楽器演奏と共に、身体で表現するパフォーマンスが繰り広げられた。2016年のレ

ッジョ・ナラでは中学生によるパフォーマンスはあったが、高校生の参加により、より年齢の高い、そして芸術を学ぶ学生達へも表現する場が提供されていた。

今回の調査では、黒人の方によるアフリカのお話、精神疾患のあるグループによる演劇など、固定観念を破り、誰もが表現する権利があり、個性豊かな表現を認めあうことが強調されていた。市民参画の表現の祭典がより多様な広がりや深まりをみせ、発展していると指摘できる。

以上より、本調査の結果を4点にまとめる。

- ・幼児へ鑑賞後に追体験して、深く感じるように促す。
- ・多様な価値観を受け入れ、表現する機会を提供する。
- ・幼児期から、小学校、中学校、高校、そして生涯学習として世代を繋ぐ表現の場とする。
- ・街中が表現の場となり、市民参画を促す。

このようなレッジョ・エミリア市の取り組みについて、図20に示した。

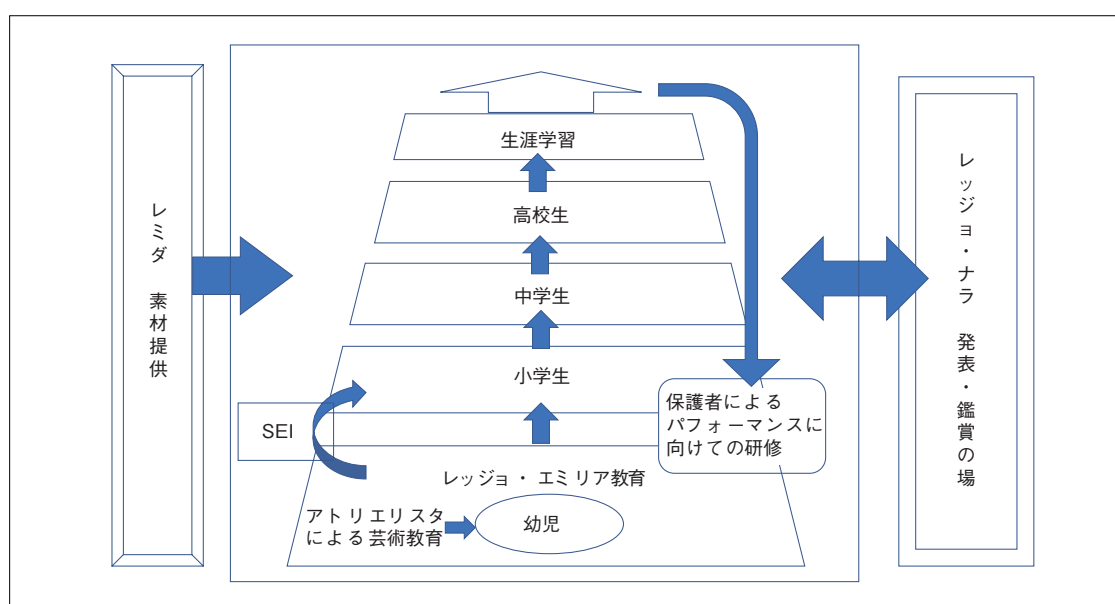


図20 レッジョ・エミリア市における幼児期から生涯にわたる芸術教育

これまでの研究より、レッジョ・エミリア市では「レミダ (REMIDA)」という市内の企業等から廃棄物等を集積し、芸術創作の素材として提供するシステムがある。また、本調査で見てきたように「レッジョ・ナラ」は市民全体に発表と鑑賞の場を提供している。レッジョ・エミリア教育では、アトリエリスタによる芸術教育が幼児期より行われ、今回の調査で小学生ではSEIが連携を図り、さらに、興味関心のある中学生、高校生へとより専門性の高い芸術教育へと繋いでいた。さらに、前回の調査（濱口、高野：2017）では、幼児学校の保護者によるパフォーマンスは専門の指導者による研修が行われており、生涯を通じた芸術教育が行われている。

つまり、幼児期からレッジョ・エミリア教育を土台として、一人一人の表現を育む中、「レッジョ・ナラ」という街全体で開催する「語りの祭典」は、年間の表現活動の発表の場である。さらに、プロの表現に親子で一緒に触れ、芸術と関わり、追体験として身体を通して感性と創造性を育む場でもある。幼児期から始まった芸術教育は、小・中・高校、そして生涯学習へと繋がり、生涯を見通した芸術教育が行われ、表現者、鑑賞者を育てている。また、「子どもの頃から市民である」という意識を持たせ、街全体が表現の場となり、プロも保護者も、障害の有無や人種を超えて、多様な表現を認め合うことにより、感性を高め、表現力、観賞力を育てていると考えられる。

【謝辞】

通訳およびイタリア語の翻訳は、中田暁子氏（通訳者・音楽家、レッジョ・エミリア市在住）にお願いし、専門の立場から情報もいただいた。深く感謝申し上げる。

【付記】

M.Castagnetti 氏へのインタビューは所属機関の承諾の上、実施している。また、Reggio narraの活動については、現在のところ、取材撮影等の制限はない。筆者らによる2016年Reggio narra の報告書「レッジョ・ナラのキセキ」（2017）については、ローリス・マラグッツィ国際センター内のドキュメンテーション・センターに提出済みである

本研究は科学研究費基盤研究（C）課題番号15K01525「身体表現・ダンス教育による接続カリキュラム構築」、およびJSPS科研費JP19K02809「市民参加型パフォーマンス評価を導入した鑑賞プロジェクトの方法論の開発」の助成を得ている。

【引用参考文献】

- ・AGAC（2012）REMIDA Day, REGGIO CHILDRENs.r.l.
- ・濱口由美、高野牧子編著（2017）『レッジョ・ナラのキセキ』レッジョ・ナラ研究会、pp.26-27
- ・濱口由美、高野牧子（2018）「市民参加型パフォーマンス評価への提案-レッジョ・エミリア市の文化プロジェクト「レッジョ・ナラ」の検討を通して」『福井大学大学院 教師教育研究』,11
- ・濱口由美、高野牧子（2019）「市民表現教育プロジェクトとしてのReggionarra、大学教育学会「美術教育学研究」第51号、pp.25-26
- ・石井希代子（2018）「人を育て文化や町を創る市民参加型イベント「レミダデー」と「レッジョナラ」」『発達』156号、ミネルヴァ書房、pp.49-54
- ・森真理（2013）『レッジョ・エミリアからのおくりもの』フレーベル館、pp.52-58
- ・S.Piccinini（2012）'A City, Its Theater, the Children : An Ongoing Dialogue'『Theater Curtain』,REGGIO CHILDREN

srl, pp.12-15

- ・ C. Rinaldi, A. Cambetti and L. Gandini
(2016) The Hundred Languages in
Ministories, Davis Publications, Inc,
pp.16-19, pp.32-33
- ・ レッジョ・エミリア市自治体の乳児保育
所と幼児学校施設、森真理訳、渡邊耕司
監修 (2014) レッジョ・エミリア市自治
体の 幼児学校と乳児保育所の指針,
Reggio Children
- ・ 佐藤学監修,ワタリウム美術館編 (2011)
『驚くべき学びの世界』東京カレンダー
株式会社,pp.232-279
- ・ 高野牧子 (2017) 「レッジョ・エミリア
の幼児教育における身体表現性」山梨県
立大学人間福祉学部紀要,第12号,pp.82-93

Art education in Reggio Emilia

— Focusing on “Reggionarra” —

MAKIKO TAKANO (Yamanashi prefectural university)

YUMI HAMAGUCHI (University of FUKUI)

Abstract

This paper examines how expressive people are fostered in the city of Reggio Emilia, with a focus on the Reggionarra, a narrative festival held in the city.

Results indicated that an individual's expressiveness is nurtured from an early age through education in Reggio Emilia.

Reggionarra has become an amazing setting where residents can express themselves while also seeing expressive activities by professionals.

The festival is also associated with the arts.

Art education starts in early childhood and continues throughout one's school years, and it leads to lifelong learning. Art education over a lifetime fosters expressive and appreciative people.

Reggionarra instills an awareness that "one is a city citizen from childhood" and it provides a setting for expression in the city. Professional artists and residents acknowledge various forms of expression, regardless of whether one has a disability or not and one's race. This increases sensitivity and it fosters expressiveness and appreciation.

Key words:

Reggio narra, art education, expression, early childhood, lifelong learning